ふるさと吉富町

私たちが暮らす「吉富町」には、現在に至るまでの数々の歴史があります。
そして、そこには現在の快適な生活のベースがあります。
そんなふるさと吉富町について、いろいろな視点からご紹介していきます。

第16回 戦時下の吉富町

終戦の日

72年前、8月6日に広島、9日には長崎に原爆が投下され、15日、日本は遂に終戦を迎えます。

毎年8月になると、全国各地で平和の集いやイベントが開催され、当時の戦禍や平和のあり方について、改めて思いを馳せる機会も少なくないと思います。

戦時下の吉富町は、どのような状況だったのでしょうか。

戦争への気運と帰らぬ人たち

明治の日本は、欧米列強に並ぶべく富国強兵をスローガンに国力・軍事力を強化していきました。徴兵令や大日本帝国憲法、教育勅語の発布等により、国家をあげて着実に戦時体制への移行は進んでいったのです。吉富町の教育現場も例外ではなく、小学校で軍事教練が行われていた記録も残っています。

日清・日露戦争で勝利を収め、戦時ムード一色となった日本は、そのまま第一次・第二次世界大戦へと突入していきます。こうした戦争の度に、吉富の若者たちは勇躍・歓呼の万歳に送られ出兵を余儀なくされたのです。

吉富町史（昭和58年発行）によると、太平洋戦争における吉富町の戦没者は、286名にものぼるそうです。

▲吉富小学校運動場での軍事教練風景

▲武運長久祈願祭の様子

米軍機の襲来

戦況が悪化の一途を辿る昭和19年、米軍機が日本内地への襲撃を開始しました。築上郡では、昭和20年に葛城村（現築上町）が爆弾に見舞われ、次いで千束村今市（現豊前市）を中心にこの地域が空襲を受け、大変な被害を受けたそうです。食料不足のうえ、常に米軍機襲来の警笛が鳴るといった状況の中、人々の恐怖と疲労は想像を絶するものであったはずです。

平和について考える

戦後72年を迎え、戦争体験を語ることができる人が年々少なくなっている中、その悲惨さを知る機会がどれくらいあるでしょうか。せめてこの時期だけでも、戦争が生み出す惨禍について学び、私たちが当たり前に享受している平和について考えることは、決して無意味なことではないと思います。